

南方熊楠の見たイギリスの考古学

——アンティカリ協会を中心に——

* 志村 真幸

はじめに

南方熊楠と考古学の関わりについては、大学予備門時代の東京（大森、西ヶ原）での土器の収集、一九一〇年前後の神社合祀反対運動（古代の史蹟が神社にしばしば見られること、「南方二書」での涙壺への言及）から、これまでも注目されてきた¹⁾。

ただ、これらは別個のテーマとして独立してとりあげられ、相互の連関を欠く傾向があった。この点に関して、イギリス時代のアンティカリ協会（Society of Antiquaries of London）の例会への参加という要素をくわえることで、一連のつながりあるものとして描けるのではないか。なおかつ、アンティカリ／アンティカリアニズムは、熊楠の活動の根幹をなす要素であり、帰国後にとりくんだ史跡保存活動／天然記念物指定運動の出発点にもなったと考えられる。これまで熊楠がアンティカリアニズムから扱われたことはなかったが、その生涯を通しての活動に新しい光を当てられると期待される。

現在ではアンティカリ協会は考古学協会と訳されることが多く、実際に地続きの学問でもあるのだが、アンティカリアニズムと考古学には明確な差異がある。その点についても、本稿で総合的に示していきたい。

また、アンティカリアニズムは、実在する物体としてのモノを対象とする点に特徴がある。熊楠は植物や菌類、変形菌といった実物を研究対象とした一方で、書物というテキストにこだわ리つけた。また、イギリス時代に生物採取のためのフィールドワークから、『ネイチャー』『N&Q』への投稿および大英博物館リーディング・ルームでの洋書の筆写へと重点を移し、それに伴って植物学から人類学、民俗学、フォークロア研究へと大きく関心を展開させている。この点にもアンティカリアニズムの側面から迫れるだろう。

一 熊楠とアンティカリ、アンティカリアニズム

一八九七年五月一三日の熊楠の日記には、「夕館より帰途鎌田氏を訪、世子方に行、鎌田氏を待合せ、九時過古物学会に行く。畢てリード、ガウランド二氏と五人、学生会クラブに行、一飲の後リード氏とつれ歩いて其宅近くゆき分る」とある。古物学会はアンティカリ協会、世子とは紀州徳川家を継いでいた徳川頼倫（一八七二―一九二五年）²⁾。鎌田栄吉（一八五七―一九三四年）は紀州藩出身だったことから頼倫に随行しており、のちに慶應義塾の塾長を務めた。館とは大英博物館をさす。リードは、熊楠が大英博物館で面倒を見てもらっていたチャールズ・リード。

そして、ガウランドとあるのが、ウィリアム・ゴーランド（一八四二―一九二二年）で、一八七

二年からお雇い外国人（化学、冶金学）として大阪の造幣局で指導的立場にあった技術者、考古学者。ゴードランドは「日本考古学の父」と呼ばれ、関西を中心に、九州や東北、朝鮮半島まで訪れ、古墳の調査、測量、図化をおこなった。一八八八年の帰国後はアンティカリ協会、人類学会、ロイヤル・ソサエティに所属し、ストーンヘンジの保全工事や年代測定に関わったことで知られる。

一九世紀末、イギリスの「考古学」は、アンティカリ協会と人類学会の二ヶ所で進められていた。両会は、テーマ的にもメンバー的にも重複しており、たとえばリードは両方の会長を務めた。ゴードランドも右記のように両会に所属し、一九〇五〜〇六年には人類学会の会長に選ばれている。

熊楠とアンティカリアニズムの関わりは深い。大英博物館で熊楠と親しく交わったA・W・フランクスは一八九二〜九七年にアンティカリ協会の会長、リードは一九〇八〜一四年、一九二四年の二度にわたって会長を務めた。熊楠が初めてフランクスとリードに面会した一八九三年九月二二日の日記には、「片岡氏とプリチッシュ・ミュージウムに行、古物学部長フランクス氏及助手リード氏に面会。午餐談話の後、館内の別室を開かれ、仏像、神具等に付尋問あり。リード氏一々ラベルに筆記す。畢て邸にかへり、談話の後、夕に至り帰る」とある。大英博物館の重鎮だったフランクスとの面会がかない、同館に出入りするようになったときの話であるが、フランクスが古物学部長と記されている。もともと大英博物館には *Department of Antiquities* という部署があった。これが一八六六年に *British and Mediaeval Antiquities and Ethnography* となったとき、フランクスが責任者に就任した。フランクスの死後は、リードが引き継ぐ。

一八六六年の部門名の変更に、イギリスが一九世紀に世界各地に植民地をもち、*Ethnography* = 民族誌の対象となるような文物が本国へもたらされるようになったためである。そのとき部門を新設するのではなく、古物学部を拡張するかたちで対応したのであった。このことは、一見すると奇異に思われるが、両者の近親性を反映したものであったといえよう（ただし、本稿では深入りしない）。

この部局を熊楠は古物学部としている。すなわち、*Antiquities* を日本語の「古物」にあてた。*Antiquities* は翻訳の難しい言葉で、おおそ古代の遺物を意味し、骨董品や古美術品と訳されることもある。古代エジプトやメソポタミアの出土品、古代ギリシャやローマの遺物をはじめ、イギリスの石器や土器、貨幣や宝飾品、中世の彩色写本などもふくまれる。ただし、かならずしも高価な品物に限らない。そして、*Antiquities* を収集・研究するのがアンティカリであり、そのような趣味・態度のことをアンティカリアニズムと呼ぶ。

熊楠は大英博物館の *British and Mediaeval Antiquities and Ethnography* という部署で、アンティカリ協会の会長であったフランクスに受け入れられ、その助手のリードのもとで *Antiquities* の整理と調査に携わった^③。すなわち熊楠は *Antiquities* やアンティカリと密接に関わっていたことになる。熊楠がアンティカリアニズムに親しんでいたのは必然といえよう。

熊楠は渡英以前から「古物」の語を用いており、一八八五年一月三日の日記に「古物学用 二十九箇」と、一月中に得た標本に関する記述が見られる。さかのぼって確認すると、一月六日の「朝六時半より西ヶ原村山林学校に趣き、松下友吉、野尻貞一二氏と校内及び滝不動辺にあそぶ。滝不動辺の化石をとらんとするも、寒氷凝固して手を下すべからず。[……] 此日二氏所採集、古土器片及古介殻を獲たり（校内及滝不動辺）」にある「西ヶ原村山林学校」出土の「古土器片」が該当するようだ。四月末にも同様の記録があり、熊楠は「古物」を考古学的な遺物をさす言葉とし

て用いていたと理解される。

幕末の代表的な英和辞典である『改正増補 英和对訳袖珍辞書』（一八六七年）を見ると、「Antiquity」に「昔時、古人、古物」の訳語があてられている⁽⁴⁾。古物の語を用いるのは、一般的であったといって差し支えないだろう。なお、「Antiquarian, Antiquary」の項目もあり、「古事を知りて居る人」とされている⁽⁵⁾。

熊楠は帰国後も「古物」という言葉を使いつづけ、蔵書の分類に「古物」「古物学」の項目を立った。M. Mallet の *Northern antiquities; or, an historical account of the manners, customs, religion and laws, maritime expeditions and discoveries, language and literature of the ancient Scandinavians*（一八四七年 南方熊楠顕彰館所蔵番号 [洋 377.24]）に「北方古物志」と訳題が書きこまれた例もある。アンティカリについて、従来は尚古家、好古家と訳され、アンティカリアニズムは尚古趣味、好古趣味、古物趣味となる。しかし、これに対して近代イギリス史研究者の川島昭夫は、日本語に訳すことの困難さを述べている。「アンティクアリーの訳語にはいつも悩まされる。私が長年愛用したコンサイス辞書には、「尚古家」「好古家」という語が収録されていたが、最近の電子辞書にこの語はないようである。現代語にあらずとしてデリートされたということか。かわって「古物研究者」「古物収集家」という訳語があてられている。しかしこれでは、アンティクアリーと呼ばれた人たちの、生来の性癖につき動かされる、止むに止まれずといった心理的動機の部分が窺い知りえなくなってしまう⁽⁶⁾」というのである。

さらに「アンティクアリーが行うのは「調査」や「研究」であるが、それはあくまで行いたいから行うもの。趣味の領域といってもよい。アカデミックな学問として承認され、たとえば大学で講座ができカリキュラムにとりいれられたことは一度もない⁽⁷⁾」と述べる。

むしろ、アンティカリは「職業ではなく「……」人間の類型」なのだと指摘し、「いたずらに過ぎし日に回顧的な愛情を抱かざるをえない欠陥人」、「尚古家の行うことは多種多様だ。教会の窓の形式を分類する人、墓碑銘を書き止める人、古書を収集する人、迷信や俗習を集める人、燧石で製作された石器を発掘する人、系図を作成する人、古英語を習得しようとする人、古代ローマ人の格好をしようとする人⁽⁸⁾」と並べている。

アンティカリは職業ではなく、学問分野でもない。そのため、意義や境界がはっきりせず、多様であり曖昧なのである。この点は、まさに熊楠の活動とも重なるだろう。なお、アンティカリと同義の言葉として、右記の『改正増補 英和对訳袖珍辞書』にも出ているように、かつてはアンティカリアンという語があったが、現在ではもっぱら「古書店」「古書業者」をあらわす言葉となっている。

二 神社合祀反対運動

熊楠がアンティカリ協会へ徳川頼倫らを案内したことは、神社合祀反対運動との関係から、橋爪博幸、武内善信らによって注目されてきた⁽⁹⁾。熊楠の文化財保護の出発点のひとつをイギリスに想定し、エッピング・フォレストの保全運動と並んで、アンティカリ協会例会への出席（およびヨーロッパとの交流）が注目されてきたのである。

神社合祀反対運動に際して、熊楠は神社を保全すべき理由を多数挙げた。そのなかに、神社に付随して見つかる遺跡を保護しなければならないとの訴えがふくまれており、このアイデアの原点に

アンティカリ協会の例会出席が考えられてきたのである。たとえば、「南方二書」では、和歌山市の日前宮に多数の古塚があったが破却されてしまった件、神子浜の神楽神社の古塚からインベ（甗瓮、素焼きの土器）が盗掘された件などが挙げられている⁽¹⁰⁾。こうした考古学的な遺物への注目は、まさにアンティカリたちがおこなってきたことであった。

同時に、この例会訪問および前後のゴーランドやリードとの意見交換は、日本における天然記念物という制度そのものにとっても重大な意義をもった。のちに徳川頼倫が文化財保全に向かうきっかけとなったのである。頼倫は一九一一年に史蹟名勝天然記念物保存協会を設立し、みずから総裁に就任した。同会の目的は史跡や老樹の保存にあり、やがて一九一九年に国によって史蹟名勝天然記念物保護法が制定される。さらにいえば、熊楠が天然記念物という制度を利用して、神島や安藤みかんを保護したことも、アンティカリ協会との関わりの延長線上にある。

熊楠は頼倫とともにアンティカリ協会の例会を訪問したことを、いくつかの機会に記している。「神社合祀反対意見―人類学校校長博士坪井正五郎教授及び同会員大野雲外君に与へたる書簡」（『牟婁新報』一九一〇年一月一八日）では、「予幼時聞及べる俚謡を考えて、海草郡和佐村□必ず古器隠蔵の塚有るべきを、龍動で旧藩主徳川侯に話し申上げるに、近年侯此事を大野雲外君に話し、遂に同村古墳石棺曲玉等の大発見に及しにて例證すべし」、また「廿九年の春、大英博物館、人類学部長「リード」氏、学士会院倶楽部で、徳川侯、鎌田栄吉氏及び予を饗せられし時、以前中の島造幣局建立者にて、目今人類学会長たる、「ガウランド」教授も来りて「日本人が陵墓制の古塚は、古へ帝都有りし地近くのみ存すと思ひ、其をのみ保存するは残念也、帝都付近ならでも多くあり、仮今年処浩漠として、誰等人の物と分らずとも、貴国の古く正しきは、職としては由るなれば、齊く悉く十分保存有度事也」と云へり」⁽¹¹⁾とある。なお、ここでは大英博物館の部局名が「人類学部」とされている。エスノグラフィアーの部分から、こう訳したのでろう。

ほかに、「英国滞在中の徳川頼倫侯」（『南英育英会会報』三〇号、一九二五年九月）では、

明治三十年夏、小生案内にて侯と鎌田栄吉氏と三人、英国皇立人類学会の例会に赴きしことあり。諸家の演舌過ぎて後、日本の侯爵来たりとて、会員二、三の人、侯に近付きいろいろ談されたり。それより、会長（只今男爵）チャーレス・ヘルキュールス・リード氏と学士会員ウィリアム・ガウランド氏（中の島の造幣局創立に大功ありし人。「森」狙仙の名画を多く所持し、英国学士会院の夜会ごとに陳列して自ら悦ばれしが、大戦中これを日本へ売り戻し、その金を国家へ寄付せり。一昨々春、本山彦一氏拙宅を訪れし時の話に、熊鷹が猴を掴むところの名画幅物は同氏が買われた由）が、侯等三人を学士会院倶楽部に延いて小饗宴を開かれ、それが済んで侯と鎌田氏は馬車、ガウランド氏はどうしたか記憶せず、リード男と小生と打ちつれ日本道でおよそ十五、六町徒歩して帰り候。

その時、リード男、小生に問いしは、かの侯は学問ありや。小生答う、学問はあまり好まぬ方なり。よって博物館へ案内して、短き時間に学問の要点どもを面白く分かりやすく説明して、半日ごとに学問の大体を会得されんことを期して同行する。なかなかの骨折りなり。⁽¹²⁾

と述べている。「英国滞在中の徳川頼倫侯」は、頼倫の逝去に際して熊楠が寄せた一文であった。さて、この二つの記録を見ると、会の名称と、訪れた年に不一致が認められる。「神社合祀反対

THE COUNCIL OF THE SOCIETY OF ANTIQUARIES OF LONDON.

SIR AUGUSTUS WOLLASTON FRANKS, K.C.B. LITT.D. D.C.L. F.R.S.
PRESIDENT.
SIR JOHN EVANS, K.C.B. D.C.L. LL.D. Sc.D. F.R.S.
JOHN HENRY MIDDLETON, Esq. LITT.D. D.C.L.
CHARLES DRURY EDWARD FORNUM, Esq. D.C.L. VICE-PRESIDENTS.
* * * * *
EDWIN FRESHFIELD, Esq. LL.D. TREASURER.
FREDERICK GEORGE HILTON PRICK, Esq. DIRECTOR.
CHARLES HERCULES READ, Esq. SECRETARY.
EDWARD WILLIAM BRADBROOK, Esq.
CASPAR PURDON CLARK, Esq. C.I.E.
REV. EDWARD SAMUEL DEWICK, M.A.
ARTHUR JOHN EVANS, Esq. M.A.
EMANUEL GREEN, Esq.
WILLIAM JOHN HARDY, Esq.
RICHARD CLAVERHOUSE JEBB, Esq. LITT.D. LL.D. D.C.L. M.P.
JOHN THOMAS NICKLETHWAITE, Esq.
WILLIAM MINNET, Esq. M.A.
PHILIP NORMAN, Esq.
MILL STEPHENSON, Esq. B.A.
JOHN GREEN WALLER, Esq.
JOHN WATNEY, Esq.

図 1

アンティカリ協会は、一七〇七年創立とされ、一七五一年に王による認可が与えられ、ロイヤル・アンティカリ協会となった。

アンティカリとは、現在でいうところの考古学、歴史学、骨董に関心をもつひとたちである。あくまでも、趣味として携わるアマチュアたちで、アンティカリとしての活動によって生活の糧を得ているのではない。協会のメンバーには、大土地所有者（貴族をふくむ）、医師、法律家、聖職者がふくまれ、博物館関係者、大学関係者、図書館員も見られた。フランクスとリードが会長を務めたように、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけては、博物館関係者が重きを占めるようになる。アンティカリ協会では、このような身分も地位も職業もことなるひとびとが、趣味の部分でつながっていたのであった。

フランクスとリードの二人とも名がある一八九五年の役員一覧【図1】を見ると、国会議員のほか、ロイヤル・ソサエティ会員もいる。学位、エスクワイアなどを示す略語が名前のあとに並び、肩書きの多いひとたちである。

協会の本部と図書・資料室は、ロンドンのピカデリーにあるバーリントン・ハウスに置かれ

意見」では、「明治二十九年春」（一八九六年）にリードが学士会院倶楽部で頼倫、鎌田栄吉、熊楠をもてなし、ゴーランドも出席したことになっている。これに対して、「英国滞在中の徳川頼倫侯」では、「明治三十年夏」（一八九七年）に、頼倫、鎌田とともに「英国皇立人類学会」の例会へ出席したとされる。この点について、従来は熊楠と頼倫が一八九六年と一八九七年に、アンティカリ協会と人類学会のそれぞれに参加したと理解されてきた¹³⁾。しかし、これは熊楠の記憶違い、混乱ではないかと思われる。

まず、熊楠が頼倫と初めて会ったのは、一八九六年七月七日のことであった。二人の初顔合わせについては、吉永武弘が詳細に調査しており、ロンドンのリージェント・ストリーートのカフェ・ヴァレーで開かれた紀州出身者による歓迎の集いであつたのがわかっている¹⁴⁾。すでに七月であり、「春」の段階で両者がともに行動していたはずがない。日記にも、あてはまりうる期間に該当する記事は見つからない。

また、古物学会と英国皇立人類学会と、会の名称が違うが、右の二つの文章、さらにこのあと見ていく熊楠の回想に明らかとなり、参加メンバーや会話の内容など、語られている内容は同一である。そして人類学会については、熊楠の日記のどこにも参加の記録は発見できない。そのため筆者は、熊楠および頼倫は人類学会にはまったく参加していないと考える。アンティカリ協会に出席したことを、のちになって思い違ひしたのであろう。混乱の理由としては、両会の性格も所属メンバーも近かったからではないか。

三 アンティカリ協会とアンティカリたち

ている。この建物には、ほかにロイヤル・アカデミー・オブ・アーツ、地質学会、リンネ協会、天文学会、化学会も所在しており、イギリスの学問のひとつの中心となっている。このことから、イギリスの学術世界におけるアンティカリ協会の位置づけが理解できるだろう。

二〇〇七年にロイヤル・アカデミー・オブ・アーツで開催された「歴史をつくる」という展覧会は、アンティカリ協会の設立三百年を記念し、同会の収集品を中心にその歴史をたどるものであった。ハンフリー・ウォンリール三人が、ロンドンのタヴァーンで顔を合わせ、その後も会合を継続することを約束して散会したのが一七〇七年一月で、それから数えて三百年ということである。ただし、このとき始まったものは、翌年までには休止してしまい、改めて会合が催され、現在までつづく組織が確立したのは一七一七年であった。ともかく、長い歴史のある学会といえよう。

アンティカリという存在は、もちろんこれ以前からおり、一七世紀の詩人であるサミュエル・バトラーは『ひとさまざま』のなかで、アンティカリを「哲学者まがい。虫が食ったような世迷言に、生まれつきの奇妙な愛情を抱いている。されば頭蓋の中に虫が巣くっているのは明らか」と酷評している¹⁵。

また川島によれば、「英国の誰彼について、人名事典で経歴を確かめっていると、思いがけず「尚古家」と記されていることがある。ただし、それはいつもほかの何かの社会的な職責や職業とくみあわされている。政治家、であって尚古家とか、文学者、であって尚古家とか¹⁶という。アンティカリが職業ではなく、趣味の部分だというのは、こういうことなのである。

川島は、ほかにもたとえば小説家のウォルター・スコット、化学者のボイル、物理学者のニュートンにもアンティカリの一面があったと指摘する。ボイルはスコットランドの妖精譚を集めたし、ニュートンは聖書の年代決定に数学の才能を応用していたからである。またニュートンの晩年に、その身辺にあつて思ひ出話を聞きとつたのは、一七一七年にアンティカリ協会が再組織されたときの中心人物で、「ドルイドの大司祭」と渾名されたウィリアム・ステュークリという牧師であつた。ニュートンの林檎の逸話も、ステュークリが記録したものである¹⁷。

熊楠について従来は、ナチュラリスト、すなわち博物学者といわれてきた。博物学とは、動物学、植物学、地質学の三つの分野に関する研究活動をさす。これに対して、アンティカリは人間に関わる部分に関心をもつひとたちであり、現在の考古学、歴史、民俗学にあたるような領域が対象となる。熊楠はたしかに博物学の仕事をしたひとだが、そこからはみでる部分も少なくない。熊楠をアンティカリと位置づけては、おかしいだろうか。

アンティカリには、だれでもなれる。学歴や地位や階層は関係ない。もちろん資格も必要ない。そのため外国人の熊楠も、フランク스에「仲間」として迎えられたのであつた。また、モノを扱うという特徴から、博物館という場がアンティカリたちの結節点として機能した。大英博物館で仕事をするようになり、フランクスやリードに「師事」した熊楠がアンティカリの世界に入っていたのは、当然のことであつた。そして、それによって従来からアンティカリの扱ってきた考古学、民俗学、歴史などへ関心を広げていったのである。

熊楠が多数の英文論考を発表した『フーツ・アンド・クエリーズ (N&Q)』もアンティカリたちが活躍する雑誌であつた。『N&Q』は一八四九年、ロンドンでウィリアム・ジョン・トムズというフオークロアや神話の研究者によつて創刊された。トムズはロンドンのウェストミンスター生まれ。一八四五年から八二年まで上院の文書館に勤務し、典型的なロウワーミドルクラスの下級官吏

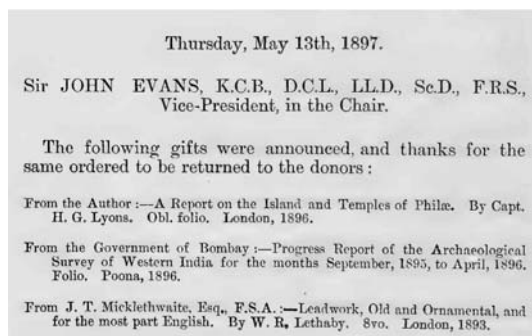


図 2

であった。そして一八三八年から、アンティカリの代表的な団体のひとつであるカムデン協会のセクレタリを務めている。パブリックスクールや大学は出ておらず、アマチュアの研究者であった。『N&Q』には「文人、芸術家、アンティカリ、系図研究者のための情報交換誌」という副題が付けられており、明確にアンティカリが読者／投稿者として想定されていた（ただし、一八六三年に「文人、一般読者など」に変更）。実際に誌面を見ても、アンティカリによる投稿が多い。署名に「アンティカリ」と添えられたケースのほか、肩書きにFSA、すなわちアンティカリ協会会員とある人物が少なくない⁽¹⁸⁾。

これらからすると、熊楠をアンティカリアニズムの世界の所属メンバーであったとみなすのに十分な妥当性があると考ええる。

四 熊楠と頼倫の出席した例会

一八九七年五月一三日の例会に参加したきっかけ、理由、目的は不明である。フランクスやリードからアンティカリ協会について説明されていた可能性は高いと思われるが、直接的な証拠は見つからない。

この頃は頼倫の二度目のロンドン滞在の宿所探しを引き受けた熊楠が、大英博物館東洋図書部長のダグラスと交渉し、いったんは決まりかけたものの、やがて決裂してしまった時期にあたる。頼倫と行動をとにもする機会は多く、例会のあった一三日以降も、あちこちへガイドしている。五月二六日には大英博物館を案内し、ダグラス、孫文と引き合わせた。九月三日には、キュー・ガーデンへ行った。このあと、九月末に徳川頼倫はイギリスを去って渡米する。

さて、五月一三日の例会【図2】では、会長のフランクスが病氣のため、副会長のジョン・エヴァンズが座長を務めた。なお、フランクスは五月二日に死去し、それにもなつてハロルド・デイルン（一七代デイルン子爵）が会長に選出される。デイルンは、当時、人類学会の会長でもあった。この日の例会で熊楠はデイルンと会話を交わしており、のちに神社合祀反対運動で海外に助けを求めようとしたとき、筆頭候補としてデイルンの名を挙げることになる（「合祀反対論英訳」『牟婁新報』一九一〇年三月一二日）。なお、熊楠はデイルン卿、ジロン卿と記した。

柳田国男宛の書簡でも、「かつて徳川侯とつれてジロン卿（ロンドン塔^{タワー}すなわち大武庫兵器陳列所、わが遊就館の大なるもののごとし、その塔の総裁）に面せしとき、侯に向かい、この人真に驚くべき学者なりと言われしは、小生は何とも思わず、また今始めて人にいうこととなるが、ずいぶんの面目なりし」⁽¹⁹⁾と記している。

この日のプログラムは、以下のようなものであった（例会の記録である *Proceedings of the Society of Antiquaries of London, Second Series, vol. xvi* による。各報告にはタイトルが付けられていないため、発表者名と概要を示した）。

・寄贈品一覧の報告



図 4



図 3

- ・モーガン・ウィリアムズ
- ・テムズ河で発見されたバイキングの剣【図3】
- ・リードのコメント
- ・エドワード・バリ
- ・テムズ河で発見された、右と同時代のノルマン人の剣
- ・シドニー・クレイン
- ・ミドルセックスで見つかった煉瓦製の容器
- ・リンカン・インの役員たち
- ・一五世紀のアラバスタ製のパネル彫刻
- ・J・A・クラーク
- ・リンカン・インで出土した水差し
- ・ベイルドン・インのコメント
- ・エヴェラード・グリーン（書簡による報告）
- ・大司教位の紋章【図4】
- ・ジョン・ホープのコメント
- ・ウィンドル教授

マンセッタ付近のローマ時代の焼きもの

残念ながら、参加者リストはなく、熊楠や頼倫についても記録されていない。さきの熊楠の回想によれば、プログラムの最初から最後まで参加したようである。日記には、夜の九時に到着したとあり、かなり遅い時間にスタートしたことが分かる。

熊楠は土宜法龍への書簡（一九〇三年七月一八日付）で、このときのことを次のように記している。

かつて紀州侯世子頼倫氏に陪して鎌田栄吉と英学士会員クラブに饗応を享けしとき、陪膳のガウランド氏（旧中島造幣所長）いわく、妙なことは日本の古代の神剣も今ここに（そのとき、テームス河の底より出でたるを、世子の覧に供せしなり）ある古ブリトン人の太古の剣も、銅と錫の合わせ方幾千分の一匁というまでも微細に合うことなり、といえり。²⁰⁾

テムズ川の底から発見されたという剣は、エドワード・バリー（ないしモーガン・ウィリアムズ）の報告にあるものだろう。終了後の会食中に、ゴーランドが日本の例と対応させて説明したのもと思われる。

またこれに関連して、頼倫のことを法龍に以下のように記している（一九〇二年五月三日付）。

徳川頼倫（家達公の実弟にて紀州侯の世子たり）龍動に在し日、予をしばしば招き色々話させて聞れたり。予も始めは固辞せしが、色々と請るるから往るなり。此人学問は嫌ひなりといふ。予思ふに指導其法を得ざるにすることに、総て貴人は愚昧の黎民よりは性質の優れたるものありと思ひ、諸処の文庫、博物館等へつれゆき、分りやすく大体の道理を条立てて話せしに、中々呑み込みよく早さとの人にて、一つかどの智識を得たりと悦ばれぬ。予言ひしは、欧州ただ見て雲烟過眼で帰たりとて何の益なき夢かパノラマ見しと異なることなかるべし、所志を貫き一事を成すとか、終夜不眠して発明して世を益するとかは貴人のなすわざに適せず、一番此行を無にせぬことは書籍多く買ひ来り、人に見せてやり、其得たる話して聴きて自ら楽まれよと申せし。果して其通りに多々書籍を買ひ入れ、旧来の蔵書と共に飯倉町の邸に南葵文庫といふを公開し、旧臣の子弟を集め縦覧せしめ居る由新聞にて見たり。これは施餓鬼や奉捨などにまざること万々にて、実に貴人の相当の楽みなる上、自来旧臣の子弟より人物多く出ることとは期して待つべし。²¹⁾

五 ゴーランド

この日は日本や東洋関連の報告はなく、熊楠らの参加した理由が分からない。ところが、この直前の例会を確認すると、ゴーランドが四月二十九日、五月六日の例会で報告（ペーパーの読み上げ）しているのが見つかる。『On the Chambered Tumuli and Burial Mounds of Japan』と題され、石室をもつ日本の古墳についての内容となっている。おそらく、これがきっかけとなって参加することになったのではない。そして例会終了後に、熊楠と頼倫に対して、前述の「神社合祀反対意見」のようなことを説いたと推定される。

ゴーランドについては、日本考古学の誕生に関わったことから、非常に先行研究が多く、アンテ

イカリ協会関連では、竹村亮仁らが調査をおこなっている²²⁾。

熊楠の日記には、ゴーランドとの交流が記録されており、一八九七年に六件が見つかる。

◇五月十三日

夕館より帰途鎌田氏を訪、世子方に行、鎌田氏を待合せ、九時過古物学会に行く。畢てリード、ガウランド二氏と五人、学生会クラブに行、一飲の後リード氏とつれ歩して其宅近くゆき分る。

◇五月二十八日

午下ガウランドを訪ふ。それより博物館に之、ダグラス氏に面す。氏、世子の室の謝絶状を出すことに決す。

◇五月二十九日

午後ガウランド氏を訪、三時に至り田島氏を訪ふ。

◇六月一二日

夜ガウランドを訪、已に十一時前なれば開けず。見る内灯消ゆ。因て散歩して帰る。

◇六月一四日

午後ガウランドを訪、不在。所借の書を返し、田島氏を訪。夕別れ出、トテンハムコートに至り、飯ひかえる。

◇一月一五日

夜荒川氏及ガウランドを訪、不在。

五月一三日の例会の日に初めて顔を合わせたあと、ゴーランド宅を五回訪問している。ただし、実際に会えたのは二回だけだったようである。熊楠がゴーランドから借りた書籍についての詳細は不明。

さらに日記をたどっていくと、一九二二年一〇月一日に、「九月のネーチュールに出たるマンの広告を見てガウランド氏の死を知る 予の知人也」とある。『マン』は人類学会の機関誌で、のちに熊楠も一九〇一―二〇年分を一括購入した。なお、南方熊楠顕彰館の蔵書類には、ゴーランド関連のものは見当たらない。

六 熊楠の史跡保存運動へ

アンティイカリ協会例会への参加はわずか一回かぎりではあったが、フランクスやリードとの関わり、そしてゴーランドからの話と合わせ、熊楠に史跡保存の重要性を認識させることになった。

一九一二年二月九日付の白井光太郎宛書簡に同封された原稿である「神社合祀に関する意見」では、次のように述べている。

和歌山市近き岩橋村に、古来大名が高価の釜壺を埋めたりと唄う童謡あり。熊楠ロンドンにありし日、これを考えてかの村に必ず上古の遺物を埋めあるならんと思ひ、これを徳川頼倫侯に話せしことあり。侯、熊楠の言によりしか否は知らず、数年前このことを大学連に話し、大野雲外氏趣き掘りしに、貴重の上古遺品おびただしく発見せり、と雑誌で見たり。英国のリッ

ブル河辺の民、昔より一の丘上に登り一の谷を見れば英国無双の宝物を得べしという古伝あり。啞おろと思ひ氣に掛くる人なかりしに、七十二年前、果たしてそこよりアルフレッド大王時代およびその少しのちの古銀貨計七千枚、外に宝物無数掘り出せり。紀州西牟婁郡滝尻王子社は、清和帝熊野詣りの御旧蹟にて、奥州の秀衡建立の七堂伽藍あり。金をもつて裝飾せしが天正兵火に亡失さる。某木の某の方角に黄金を埋めたりという歌を伝う。数年前その所を考え出し、夜中大なる金塊を掘り得て逐電せる者ありという。⁽²³⁾

地中から古代の貴重な遺物が発見された例をイギリスと日本から紹介し、なおかつ現地に伝わる「童謡」「歌」との関連性を指摘している。まさに考古学と民俗学の合流点にあるような逸話といえる。

一九一〇年一月一日から『牟婁新報』に連載された「神社合祀反対意見―人類学校長博士坪井正五郎教授及び同会員大野雲外君に与へたる書簡」では、すでに引用したロンドンでの頼倫との会話に続けて、「富田の権現平なる岡に、金比羅社有し」「……」里伝に、古へ熊野権現此岡に鎮座せし「……」此所でも古器出でし事あり」とし、さらに、

今紀州の諸社を見るに、多くは太古其地を司り住みし貴人の塚の上に立る者にて「……」其中実に「陵墓制」なるも少からず「遺品」を伏□るも多し、耶蘇教は過激の教にて、其欧州に入り弘まるに際し、一切の古社旧蹟を滅却して顧みず、其余弊英独の旧邦と自称するすら、辛うじて六七百年前の史蹟を存せるのみ、故に目今銳意して有史前の遺蹟を還原保存するに務め、随所其会合あり、甚しきは、知人「ノーマンロツキヤー」男等は断片の里話と星曆の学とを参考して精緻の科学機械を發明し以て古碑古塚を□興せるに力め居れり⁽²⁴⁾

とする。そのあとにも、「ネーチュール」雑誌、十一月十一日刊行の分に、独逸国自然遺蹟保存会奨励の実況を載せあるを見て「(一月一日)、「熊野諸王子の社を見るに何れも最古き本邦固有の神社にして実は上世貴人の塚を斎祀せるを、後に神書に著き諸神を勧請し、社殿を其上に建た」(二月二日)とある。熊楠の意識が史跡や遺物の保存へ向かっているのが読みとれる。

前述のように、アンティカリたちは博物館と強いつながりをもった。大英博物館のフランクストリードが代表であるが、もっと早い時期にも、たとえばイライアス・アシュモール(一六一七―九二年)が集めたコレクションは、オクスフォードのアシュモリアン博物館となっている。フランクスは自身でもローマ遺物、東洋陶磁、根付、カードなどを集め、のちにあちこちの博物館に収蔵された。アンティカリたちの集めたものの保存と管理には、博物館への収蔵が確実であった。

さらにここからは、コレクションの形成方法という問題が出てくる。考古遺物を集めるには、もちろん自分で発掘すればよいのだが、ほかの発掘者や仲介業者から購入することもあった。すなわち遺物、遺跡、出土品は誰の所有に帰すべきなのかという、現在までつづく問題を見ることがができる。

このことに熊楠は気付いており、「南方二書」で次のように説明する。

英国の treasure trove の法に倣い、土器、石器、そのほか土中より掘り出す考古上の品は、一

切皇室の物とし、その筋へ献上し、その筋にて御査定の上、大学または帝室博物館へ留め置かれ、さまでにもなき品は本人に下付して随意に売却せしめ、また社地より出たるものは、これをその社に下付して神宝とし、永世保存せしむること。

このことはもつとも必要なることにて、只今も当地近く、古塚より曲玉、インペ、管石等おびただしく出で候も、小生は往き視ず。視たところで、ただただ姦商を惹き出し、種々悪策を生ぜしむるのみなればなり。この辺で出る古器に珍なもの多きも、何のわけもなく散佚するは惜しむべし。何とぞ政府にこのことに関する bureau を作り、軽便なる方法をもって、かかるもの出ること役場より一切ひとまず政府へ送らせ、大学等にて鑑査の上、取り上ぐべきものは皇室の御有として、大学等へ留め置かれ（英国も然り）、不明の分は本人へ還すようありたきことなり。

さて、漸をもつて諸神社蹟また古塚等を巡廻して発掘させ、一切皇室の御物とされたきことなり。（それぞれへ御貸し下げは適宜とす。）⁽²⁵⁾

近世以降、西ヨーロッパでは、国土はすべて究極的には国王の所有下にあると考えられるようになり、treasure trove、すなわち出土物も国王のものみなされた。二〇世紀初頭になると、考古遺物の発見者は報告の義務を課された。適切な公的機関に引き渡されたのち、博物館などに収蔵された場合には、対価として「適切な金額」が財務省から支払われるのが慣行となった。そのことを熊楠は知っており、松村任三を相手に、日本でも同様の仕組みをつくるべしと説いているのである。

以上は埋蔵文化財の出土に対応するものだが、一方で日本の「史蹟」にあたるものを保護する法律は、イギリスでは Ancient Monuments Protection Act 1882（正しくは、An Act for the better protection of Ancient Monuments）を嚆矢とする。中心になって推進したジョン・ラボックは、銀行家、政治家、生物学者、アンティカリで、大英博物館理事も務め、人類学会の初代会長（一八七一―一七二二年）、アンティカリ協会の会長（一九〇四―〇八年）にも就いている。

ラボックは一八七三年から立法に向けて活動しており、当初は「先史時代やローマ時代のアンティキティーズ」を対象として考えていた。まさにアンティカリによって、アンティキティーズを守るためにつくられた法律だったのである。結局は「モニュメント」、すなわち構造物へと変更されたが。一八八二年法のあとは、一九〇〇年法、一九一〇年法などとして改正されていく。

一八八二年法はイギリス国内の六八ヶ所の遺跡の保護を目的とした。ほとんどが先史時代のものであり、多くは土塁などの地表構造物、石造の遺跡であった。一覧を見ると、ストーンヘンジ、シルベリー・ヒル、エーヴベリのヘンジなどが並んでいる。

熊楠の時代のアンティカリたちは、まさにこのような文化財保護と法整備に奔走していた⁽²⁶⁾。そのような状況を身近に見聞きしていた熊楠が、神社合祀反対運動に際して参考としたのは、当然といえよう。

以上、述べてきたように、熊楠をアンティカリやアンティカリアニズムの世界から再照射することは、熊楠研究に新しい局面を開くのみならず、日本の文化財保護の始まりを明らかにするにも重要なのである。

注

(1) 志村真幸「南方熊楠のカニバリズム―モースの大森貝塚からロンドンへ」『他者』としてのカニバリズム」橋本一径編、水声社、二〇一九年。／武内善信「闘う南方熊楠―「エコロジー」の先駆者」勉誠出版、二〇一二年。／中尾優司「大森貝塚と西ヶ原貝塚における南方熊楠の採集と考察」『南方熊楠研究会、二〇一九年八月四日（口頭発表）』。

これらを接続する試みとして、二〇二三年度の南方熊楠研究会夏期例会にて、シンポジウム「南方熊楠と考古学」（二〇二三年八月五日、領塚正浩、牛山英昭、志村真幸、武内善信、西村銅児）を開催した。

(2) 徳川頼倫については、下記を参照した。林淑姫「徳川頼倫試論（一）―ひと・仕事・時代」『南葵音楽文庫紀要』四号、二〇二一年。／「徳川頼倫」南方熊楠顕彰館、第三七回月例展、岸本昌也、二〇二三年一〇月五日―十一月三日。

(3) 松居竜五「C・H・リードから南方熊楠への来簡―内容紹介と翻刻・翻訳」『熊楠研究』一一号、二〇一七年。／田村義也・松居竜五・志村真幸・ブラダン・ゴウラン・ガチャラン「南方熊楠自筆資料 大英博物館所蔵フランクスおよびリード宛て書簡」『熊楠研究』一七号、二〇二三年。

(4) 『改正増補 英和対訳袖珍辞書』堀達之助編、開成所、一八六七年、一八ページ。

(5) 同。

(6) 川島昭夫「英国の尚古家―スコット・ボイル・ニュートンも」『日本古書通信』九六二号、二〇〇九年、四ページ。

(7) 同。

(8) 同、五―六ページ。

(9) 武内、前掲書。／橋爪博幸「南方熊楠と「糸田猿神祠」合祀事件」『人間・環境学』六号、一九九七年。

(10) 『南方熊楠全集』七卷、平凡社、一九七一年、五二〇―五二二ページ。

(11) 一月一八日掲載分。野村さなえによる翻刻を利用した。

(12) 『南方熊楠全集』別巻二、平凡社、一九七五年、二三七―二三八ページ。

(13) 武内、前掲書、二七一ページ。

(14) 吉永武弘「徳川頼倫と南方熊楠の出会い―ロンドンにおける紀州出身者の集いとその日付問題」『関西英学史研究』一号、二〇〇五年。

(15) 川島、前掲、五ページ。

(16) 同、六ページ。

(17) 同。

(18) 志村真幸「南方熊楠のロンドン―国際学術雑誌と近代科学の進歩」『慶應義塾大学出版会、二〇二〇年、一六〇ページ』。

(19) 『南方熊楠全集』八卷、平凡社、一九七二年、二二一ページ。

(20) 『南方熊楠 土宜法竜 往復書簡』八坂書房、一九九〇年、三三二ページ。

(21) 『高山寺蔵 南方熊楠書翰 土宜法龍宛 1893-1922』奥山直司・雲藤等・神田英昭編、藤原書店、二〇一〇年、三〇一ページ。

(22) 竹村亮仁「ロンドン古物学協会ゴーランド・ノートと大英博物館ゴーランド・コレクションとの比較・照合」『京都橘大学大学院研究論集 文学研究科』一三号、二〇一五年。／竹村「ロンドン古物学協会に残る古墳資料―金属製品に関するゴーランド記録」『京都橘大学大学院研究論集 文学研究科』一九号、二〇二一年。

(23) 『南方熊楠全集』七卷、五五七ページ。

(24) 一月一八日掲載分。

(25) 『南方熊楠全集』七卷、五〇八ページ。

(26) 熊楠がイギリス流の文化財保護をめざしたことが、ドイツ流をとりいれた日本の文化財保護（史蹟名

勝天然記念物保存法」と対立し、徳川頼倫を批判にする姿勢につながった可能性が指摘できよう。

一九二二年の日記については、岡本清造・中瀬喜陽による翻刻資料を利用した。

British Archeology Seen by MINAKATA Kumagusu: Focusing on the Society of Antiquaries of London

Masaki SHIMURA

While MINAKATA Kumagusu (1867-1941) was staying in UK, he had a chance to attend a regular meeting (13, May, 1897) of the Society of Antiquaries of London. TOKUGAWA Yorimichi (1872-1925), the heir of the Lord of Kishu where Minakata's family long lived, accompanied him to this meeting. After the meeting, William GOWLAND (1842-1922), former director of the Nakanoshima Mint in Osaka, explained about the importance of the preservation of the historic sites to the Japanese guests. Kumagusu was then making academic research in the British Museum where he made friends with so called "antiquaries" such as A. W. Franks and C. H. Read, then working as the curator of the major departments of the Museum. The antiquaries at the time were making efforts to enact An Act for the better protection of Ancient Monuments, and Kumagusu who later launched a pioneering natural preservation movement in Japan, was probably deeply inspired by these British antiquaries. It is therefore quite important to redefine the thought and activities of Kumagusu in the context of the British archeology and antiquary movement.